

平成28年第2回 総合教育会議 会議録

1 日時 平成28年11月22日（火） 午後3時から午後3時30分まで

2 場所 碧南市役所4階 庁議室

3 出席者

(1) 碧南市長

(2) 教育委員会

委員 高橋世利子、委員 加藤 譲、委員 池田香代子、委員 伊藤正幸

教育長 高松 透

(3) 事務局職員

総務部長 金沢宏治、教育部長 鈴木重幸、経営企画課長 岡崎康浩、経営企画課主

幹 三島 翁、経営企画課政策推進係長 本多 真、経営企画課政策推進担当係長

鈴木好美

(4) 関係職員

学校教育課長 川隅義孝

4 傍聴者 0人

5 議題

(1) 不登校対策について

(2) 意見交換

□開会

(総務部長)

ただ今より、平成28年度第2回総合教育会議を開会いたします。

まず始めに市長よりごあいさつを申し上げます。

□市長あいさつ

(市長)

本日、今年度第2回目の総合教育会議ということですが、伊藤委員におかれましては、初めての総合教育会議ご出席ということで、よろしくお願いいたします。また、高橋委員におかれましては、10月より新たに教育長職務代理者としてご活躍いただきありがとうございます。

本日も、充実した会議となりますようお願い申し上げまして、ごあいさつとさせていただきます。

(総務部長)

ここからの議事の進行は今回の招集者である市長にお願いいたします。

□議題（１）不登校対策について

学校教育課長が資料に基づき説明した。

＜説 明＞

(市長)

今の説明に対しまして、何かご質問等ありましたらどうぞ。

(伊藤委員)

個別で調べてみたのですが、２０１２年度（平成２４年度）の文部科学省の調査では、中学校の不登校は２．５６パーセント、小学校は０．３１パーセントとなっており、ご説明の数値と違うようですが。

(学校教育課長)

そちらの資料は病欠者を抜いた数値になるかと思われます。よって、今ご説明した数値とは異なります。

(市長)

全国的に数値が同じような傾向になるのですね。しかしながら、碧南市は少ないですね。何か理由があるのですか。

(学校教育課長)

教員以外の手厚い支援体制ができていて、それが続いていることの成果だと思います。

(市長)

不登校の状態から立ち直った人はどれくらいいるのですか。

(教 育 長)

毎月、学校から報告があるのですが、不登校の状態が30日を越えた時点でカウント1となってしまう、その後立ち直ってもカウントは消えないので、数値としては把握できておりません。

(伊 藤 委 員)

カウント方法は、全国统一されたものですか。

(学校教育課長)

はい。

(市 長)

直る子もいるのですよね。

(学校教育課長)

はい。小学校の頃からひきこもり状態だった子が、家庭訪問を繰り返すうちに登校できるようになったというケースも聞いております。

(教 育 長)

しかし数は多くないです。

(加 藤 委 員)

現在、不登校児は全国で1万3千から1万5千くらいと言われているのですが、その中で碧南市は本当によく取り組み、そしてその成果が出ていると思います。現場の先生の負担は非常に大きいものだと思います。過去には、年300日ほど家庭訪問していた先生もいます。先生は学校に来ることが最良という信念で取組んでみえます。しかし、最近は親や社会の見方が変わってきています。学者や評論家などは、無理に学校に行かなくてもいい、多様性を抱えた時代だから多樣的でいいと言っています。その結果、親もそれでいいという考えに変わってきているように思います。個人的な考えではありますが、例えば、出席

日数にこだわらず、学力があるかないかで卒業を決めるという方法もあるのではないのでしょうか。決められた日数学校に通い、ある一定以上の学力を身につけるのが義務教育なのですから、最終的には学力で決めるということも考えられるのではないのでしょうか。

(伊 藤 委 員)

委員のお話は、自分で行かないと決めて行かない子にとってはいいと思います。しかし、行きたくても行けない子もいるわけです。先日の学校訪問で、不登校生徒には無気力な子がいる、中学生で九九もできないような子がいる、とお聞きしました。そうした子達を救い上げるようなことができる対応できるのではないかと思います。

そう考えていくと幼児教育ですね。子どもの時に教育の機会を与えられなかった子達がある。その中に何パーセントが含まれているような気がします。自分で行かないと決めている子もいるでしょうし、無気力な子もいますし、そういったところを見分けて、きめ細かい対応をしていく必要があると思います。

(池 田 委 員)

精神障害のある人を就労指導していますが、30代、40代で掛け算のできない人がいます。話を聞いてみますと、ひきこもっていて学校に行っていない、親にも教えてもらっていない、友達もいないという環境の中で、45才で初めて就労し、仕事の中で掛け算を覚えています。そこで、やはり幼児教育の重要性を感じます。最低限の学力があるからこそ社会に出たとき適応できるということが言えます。一方、発達生涯などの精神的な病気もあると思いますので、周りが早く気づいてあげて、薬を飲むなど対応することも大事なことでと思います。

友達の声かけによって外に出られるように、友達や地域など、専門家だけでなく身近なところでの連携によって対応できることもあると思います。例えば、自助的な不登校児の親のネットワークはないのですか。

(教 育 長)

そういった連携もあります。ただし、それを自ら認めた人だけが入っています。それを認めない人が難しいのです。

(池 田 委 員)

自助的なグループの集まりの中で、当事者自身、または当事者のご家族の方の心を動かさない限りは、その状態は変わらないと思います。

(教 育 長)

私は当事者のご家族の心を動かすことが一番大きいと思います。しかし、なかなかそうならないので苦労しています。ご家族の方が気づけば、小さい頃から何らかの対応ができ、社会に適応できる子に育てることができます。ご家族の方がそこを認めてくれるかどうかが大きいです。

(池 田 委 員)

保育園の先生が子どもの状態に気づいて、お母さんに声をかけていたということがあるようです。就学時前の時点で親も子も救ってあげることが、キーポイントだと思います。

(教 育 長)

しかし、そこはとてもデリケートな部分ですので、保護者に伝えることは難しいです。

(高 橋 委 員)

勉強についていけないわけでもなく、いじめられているわけでもなく、友達がいなくてもないのに、突然不登校になってしまった子がいました。しかし、先生が真摯に取り組み、結果的には学校に行けるようになりました。この時、先生と家庭の連携はとても大切だと痛感しました。

(市 長)

やはり、手をかけるべき時にしっかり手をかける、これが大事ですね。碧南市はこれを維持していきたいと思います。

(議題(2)意見交換については、議題(1)不登校対策についてで同時に行われたため省略)

□閉会

(総務部長)

それでは、これをもちまして平成２８年度第２回総合教育会議を閉会とさせていただきます。